

2019年度置賜支部地区別カンファレンス1グループ活動報告

第1回

日時：令和1年7月4日（木） 18：30～20：00

場所：三友堂病院 リハビリテーション室

参加者：29名

症例発表

①会田 航（三友堂リハビリテーションセンター）

「右視床出血により左片麻痺を呈し、自宅退院を目指した症例

～環境調整に着目した関わり～

自宅退院に向け日中ADL、IADLの自立が必要であったが、疼痛の訴えが続き、動作レベルの向上を図ることに難渋した。本人様の意欲に合わせながら能動的に動作できるような自主練習を早期に取り入れること、本人様と目標を確認しつつ動作練習を行うことで意欲的になるような関わり方が必要ではないか、などの意見が挙がった。

②鈴木 晃希 先生（リハビリ特化型デイサービス Reはーと）

通所リハビリに通うも、自宅での生活では活動性低下みられ廃用を引き起こしている。ベッド周囲を環境調整していただき移動していただくような関わり方、ご家族様への指導でなるべく離床していただくような関わり方を提示していければいいのではないかと、等の意見が挙がった。今後は目標を再確認していき、動作レベルの向上を図る関わりをしていく。



第2回

日時：令和1年8月28日（水） 18：30～20：00

場所：舟山病院 大会議室

出席者：20名

症例発表

①深瀬 友浩 先生（舟山病院）

「左大腿骨転子間骨折を呈した症例

～在宅復帰の条件であるポータブルトイレ自立を目指して～

入院初期は起居動作全介助レベルであったが、機能面、能力面の向上に伴い目標をこまめに変更していき介入していった。ポータブルトイレ自立に向けて介入するが本人様の要望はポータブルトイレを使いたくないとの訴えもあり、自宅のトイレでの誘導も見据えての練習も組み込んでいく。

②遠藤 彩加 先生（三友堂病院）

「肺癌による症状緩和及び QOL 向上のために在宅酸素療法を導入した症例」

地域包括ケア病棟での関わりの中で、病態に合わせての活動性の向上、HOT の提案をできた症例。それに伴い、呼吸状態の安定を図り QOL を向上することができている様子であった。また、介入初期のせん妄については、御家族様の支援を協力いただくような病棟との他職種との連携を図っていく重要性も周知できた。



第 3 回

日時：令和 1 年 10 月 23 日（水） 18：30～20：00

場所：三友堂リハビリテーションセンター 理学療法室

参加者：20 名

症例発表

①佐藤 圭佑 先生（三友堂リハビリテーションセンター）

「アトトーゼ型脳性麻痺の既往がある重度頸髄症術後の症例」

入院初期から下肢筋緊張亢進しやすく、腹筋群の収縮も乏しく起立・立位で見守りを要すレベルで独歩は軽介助レベルであった。現在では、上記機能改善に伴い復職にむけた支援を行っており、手すり伝い歩行や階段昇降練習も行っている。今後は定期的な外来や通所リハビリの必要性、回復期病棟から退院した後の生活のなかに自主練習を取り入れられるかが重要。

②村上 卓也 先生（国立病院機構 米沢病院）

「ADL 低下により自宅退院から療養生活へ方針転換となった多系統萎縮症を呈した症例」

起居動作から全介助を要し、臥床傾向で易疲労性あり目標を介助量の軽減としていくも、経過の中で自宅退院から病院での療養生活へ変更となる。現在では、起居動作は中等度介助となりトイレへの離床可能となってきたが、進行性疾患であることから目標再設定を随時していく。また、少しでも興味を持っていただくような趣味や機会を検討していく。

